
ゼロの使い魔、たっくんが使い魔になりました。

セラフ零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔、たつくんが使い魔になりました。

【Nコード】

N3760Z

【作者名】

セラフ零

【あらすじ】

ただ単にゼロの使い魔でルイズがサイトの変わりにたつくんを召喚してしまいましたっただけです。

割とタイトルの割には中二要素が満載です。

主にシリアス的な意味で。

555は好きだけど話の流れは小学生のとき以来なのでうる覚えです。

設定をウィキで調べながら行きます。

ただの思い付きです。

出会い、召喚と狼と仮面

……ここは何処だ。

一人周囲を見回してそう思う。

確かに自分はある時灰に成り果ててしまったはずだった。だというのに何故ここにこうして立っているのだろうか。

目の前には桃色の髪をした少女が一人。

その周囲には彼女と同じ年代と思われる少年少女たちが一様に自分のことを見ている。

服装から推測するに、彼女たちはおそらく学生なのだろう。

一人だけいる頭の輝くおっさんは引率の教師と見たほうがいいだろう。

なにやら桃色の髪の少女が頭の輝く男に何かを訴えているかのようだがそれは聞き届けられなかったらしい。

肩を落とし、少し赤くなりながら彼女はこちらに近づいてきた。

「感謝しなさいよね。貴族にこんなことをされる事なんて、ないんだから」

何を言ったのかは解らなかったが何かをしようとしているのは解る。

「おいお前！ 一体何を」

彼がその言葉をつむぐ前にその口は少女の口で塞がれた。

唐突の事に驚きで言葉を失った。

そして我を失っているその一瞬の後に彼の体に異常が起こる。

左手の甲から全身に広がる苦痛。

焼けるような痛み。

何かが刻み込まれるかのような、そんな痛み。

まるで自分の体に烙印を押されるかのような、そんな歪な苦痛に彼は耐える事が出来ずに気を失ってしまう。
この邂逅が何をもたらすのか。
今はまだ、誰にもわからない。

出会い、召喚と狼と仮面（後書き）

さて、オリジナルの展開にするか。

ある程度原作に沿ったシナリオにするか。

ゼロ魔は全部読んでないから無理だろうしな！。

異なる世界の異なる人間（前書き）

たった二話分の話を作るのにこれほど時間がかかるとは。
うる覚えで書くのは良くないね。

アニメを見ながらだし。

しかもたつくんの性格は忘れてるし。

サイト……実は君も入れたかったんだ。

でも、君を化け物にするのには些かあれだったのだよ……そして君
と巧が一緒にいられる理由が見つからなかったんだ……。

ごめんよ。本当にごめんよサイト……。

異なる世界の異なる人間

「夢を持つとね、時々すつごく切なくて、時々、すつごく熱くなるんだ」

「夢ってのは呪いと同じなんだ。途中で挫折した人間はずっと呪われたままなんだ」

「俺には夢がない。でもな、夢を守ることは出来る」

「俺はもう迷わない。迷っている内に人が死ぬのなら……」

「戦うことが罪なら」

夢を見た。

ひどく懐かしい夢だ。

あれは自分が人として戦う力を得た頃の記憶。

赤いフォトンストリーム、銀色の装甲、黒いスーツ、黄色の複眼。

まるで英雄^{ヒーロー}のような姿となって彼が対峙していたのは、灰色の化物と呼ぶに相応しい生物。

何故今更こんな夢を見たのだろう。

まるで走馬灯のよう。実際彼は死んでいるのだから間違いはないだろう。

「やっと起きたのね」

巧が目を覚ますとそこはどこかの部屋だった。

昼間いた場所は広場だったから運ばれたのだろう。

黙って彼は周囲を見渡す。

ベットにクローゼット。小さなテーブルが一つ。

おそらくここは彼女の部屋なのだろう。

小ぢんまりとした部屋だ。シャワールームがないどころか、電気も

ない。部屋に明かりを灯しているのは蠟燭のみ。

「おいお前。お前は一体なんだ。ここは一体何処なんだ」

「まったく、貴方を運ぶの大変だったんだからね。あんなところで気を失って。ご主人様にいきなり迷惑をかけてから」

巧の言葉など聞こえてもいないかの様に、彼女はただ一人話を続ける。

「お前いい加減にしろ。人の話を聞け！」

彼が叫ぶとルイズは鬱陶しそうに頭を左右に振る。

「ああ、もう。五月蠅いわね！ ええっと、確か沈黙の魔法を……」

彼女はそういうと、ぎこちない口調で呪文を唱える。

当然の如く魔法は本来の意図に反し爆発を起こす。

それに驚くことも無くルイズはケホッ、と咳を一つする。

「お前は俺を殺す気か！」

突如と起きた爆発に驚きながら怒鳴りつける。

え？ と。彼女はきょとんとした表情で巧の顔を見る。

「というか、一体何が起きたんだ！ 何も無い所から爆発が起きるなんて」

「解る！」巧の言葉をさえぎってルイズは声を上げる。「あんたの言っていることが解るわ！」

「ああ？」

それに対して怪訝そうな表情をする巧。

今まで自分の言葉は理解できていなかったとでも言うのだろうか。だとするのなら問い尋ねても鬱陶しがるだけで相手に伝わらないのも理解できる。

面倒くさそうに頭をかくと、溜息を一つ吐いた。

「で、ここは一体何処なんだ。そもそもお前は俺のご主人様とやらないだろ」

その場に座り込みながら、巧は尋ねた。

ちらりと左腕も確認しながら。

「ここはハルケギニアにある、トリステイン魔法学校よ。あんたは私の使い魔として召還されたの。それより、あんたの名前をまだ聞いていなかったわね」

「人の名前を尋ねる前にまずは自分の名前を名乗ったらどうなんだ」
「……態度は気に食わないけど。まあ、良いわ。私の名前は、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「本当に外人みたいな名前だな。の癖に日本語しゃべれるじゃないか」

「さっさとあんたの名前を言いなさい！」

「俺の名前は乾巧だ」

「変な名前ね」

「無駄に長いお前にだけは言われたくねえ」

鼻で笑いながらそういう巧。正直どうでも良いのだ、名前のことなんて。

「全く、どうして私の使い魔がこんな礼儀もなっていないただの平民なのかしら」

うんざりした風に彼女は肩を落とす。

全くもって心外だ。此方は好きで呼び出されたわけではない。むしろ迷惑しているのだ。

普通の人間ならこんなの性質の悪い宗教か何かだと思っはずだ。それ以前にこんなものは明晰夢の類だと思っに違いない。

一瞬だが巧もそれに順ずるものか何かだと思ったのだ。

だが肉体に至る痛みは現実のもの。それはこれが現実であるという覆しようのない事実。

それに、彼自身がまるで悪夢のような体験をしてきたのだ。

死者が化け物となってよみがえるなんて。どこぞのB級映画じゃあるまいし。

「俺が知るかよ。ったく……」

溜息を一つはくと、そのまま元いた場所で横になる。

「ちよつと、話はまだ終わってないわよ！」

「うるせえな。もう寝かせろよ。色々あつて疲れてんだよ」

それっきり巧はなにも言わなくなつてしまった。

どうやら本当に寝てしまつたのだろう。

溜息をはくとそのまま彼女も着替えて寝ることにした。

この使い魔に振り回されてばかりでルイズ自身も疲れたのだろう。すぐにまどろみへと意識を手放してしまった。

そして翌朝。

「朝よ、早く起きなさい！」

能天気なのか図太いのか、敷き詰められた藁の上で寝転がっていた

巧を起こす。

うなり声を上げながら、巧はゆっくりとその体を起き上がらせる。
この状況で十分な休息を取る事ができるなんて、どれだけの図太い神経をしているのだろうか。

「まったくご主人様よりも長く寝るなんて。出来損ないも良いところだわ」

「だから俺はお前の使い魔とやらになつたつもりはねえ」

面倒くさそうに彼は言う。

「黙りなさい。貴方の左手に刻まれているルーンがあんたが私の使い魔である何よりの証拠じゃない！」

ルイズは怒鳴りつけると適当に引つ張り出した制服を巧に投げつける。自分の下着もついでに、だ。

「おい、こいつは一体何のつもりだ」

「私に着せるのよ」

「はあ？ そのくらい自分でやれよ」

「普通貴族は召使を抱えている場合、自分で着替えなんてしないのよ。わかった？」

「ふん、つまりは自分では何にも出来ない役立たずって事か。だから着せ替え人形みたいな事が出来るって事か」

「へえ、ああ、そう。じゃあ貴方には罰を与えないとね」

少しばかり考え込むと彼女はすぐに答えを出した。

「そうね、これから貴方に朝食を出そうと思っていたけれど、そんな態度を取るようならご飯はなしで良いわね」

どうやら彼女が考え付いた罰というのは食事をなしにするというもののらしい。

彼も生物である以上、空腹には勝てないと判断したのだろう。普通ならそうだが、乾巧という人間は違った。

「ああ、別に構わないぜ。俺は俺で、食料を調達してくるからな」
そんな軽口をたたくと、彼はゆっくりと立ち上がって扉へ向かう。

「ちょっと、一体何処へ行くつもり？」

「言っただろ。俺は俺で調達してくるってな」

「使い魔がご主人様のそばを離れる気！？」

「だから何度も言わせるな。俺はお前の使い魔じゃねえよ」

それだけ言っただけで部屋を出ようとしたその時だった。

背後から突然首に枷をつけられたのだ。鎖のついた首輪。

さながら犬のようなそれを手で触って確認する。

「一体なんだよこれは！」

「私の使い魔が勝手に行動しないようにするための鎖よ。まったく。念の為に準備しておいて正解だったわ」

「俺は犬でもねえぞ！」

「黙りなさい。貴方はそれをつけていれば良いのよ」

ふざけるな！ と巧は怒鳴りつける。けれどルイズは何処吹く風か、平然とした態度で鎖を引っ張って柱にくくりつけた。

その気になれば巧はこんなちゃん鎖一本引きちぎれない理由がない。

だがそれをする為に力なんて使いたくないのだ。

自分が忌み嫌う力を。

巧がその場に座り込んで黙りこくっている内に、ルイズは制服へと着替える。

目の前に男がいるなんて意識すらしていない。ただ、そこに物がある程度の認識に過ぎないのだろう。

手早く着替え終わると、そのまま鎖を引っ張って部屋を出る。

てもでも動かないつもりだったが、思ったよりもルイズの力が強くて仕方なしについていくしかない巧であった。

「おい、これから一体何処へ行くんだ」

「五月蠅いわね。朝食よ」

「は、食事抜き俺に自分たちの食事を見せ付けるってか」

「それは貴方が悪いのよ。貴方が私に従えば、最低限の食事、生活は確保してあげると言ってるの」

「それで俺に使い魔をしるってか？　こんなわけも解らない世界にまできてどうして訳の解らん事をしなけりゃならねえんだよ」

「良いから黙ってついてきなさい。どうせ、貴方は元の世界に戻る方法なんて無いんだから諦めて私の使い魔をしたほうが賢いと思うけど」

「……別に俺は元の世界に戻りたいって訳でも無いけどな」

「何か言った？」

「別に」

「不服があるなら勝手になさい。私だって別に好きであんたを召喚した訳じゃないんだから」

「そうかよ。こっちも良い迷惑だぜ。折角人が感動的な別れをしていたって時に」

「別れ？　あんた一体何をしてたの？」

「色々だよ色々」

「その色々って何よ。気になるじゃない」

「別にお前やこの世界には関係の無い話だ」

全く持つてその通り。

この世界に灰色の化け物はいないし、そもそもあのベルトも此方には無い。

今更、昔のことを語った所で何の意味もない。

どうせ、この世界からしても荒唐無稽な話だ。

目の前のこの自意識過剰な少女が信じるとは思えない。

あの世界は今、どうなっているのかは気になるのだけれども、前までなら、彼はどうでもよかったのだろう。

でも、夢が出来た今の彼には、気になって仕方が無いのだ。

（夢は呪いと一緒……か）

ふと、そんな言葉を思い出した。

確かに意味は解った。

その夢を実現する前に、自分は自分という存在を失ったのだから。

「だから、そんな言い方をされると余計に気になるじゃない！」

「良いだろなんだって。話したところで俺の待遇が変わるわけじゃねえんだから。それに一体お前と何の関係があるってんだ」

「関係あるわよ。使い魔は一生変える事が出来ないの。つまり、使い魔のことを知るのは主人としての義務よ」

「そうかよ。俺は話したくないがな」

「ご主人様の……ってあんたに言っても無駄だったわね」

溜息をはくとそのまま先へ進んでいくルイズ。

その後ろを巧は不機嫌そうな表情でついていく。

今更、あんな話をしたところで本当に何になるというんだ。

あんな凄惨な、下らない人間の物語を。

やがて食堂までたどり着くと、一斉に好機の瞳が二人に降り注ぐ。

「噂の人間の使い魔だ」

「思っていたよりも結構格好良いわね」

「でも鎖なんて」

「よつぽど暴れたんだろうな」

「所詮は平民の使い魔だな」

「品性のかけらも無い」

「格好もみすばらしいですし」

「僕の美しさには到底及ばないさ」

それぞれが好き勝手に言葉を口にしていく。

それを聞こえないフリをしながらhつありは歩いていく。

「ほら、早く椅子を引きなさいよ。気がきかないわね」

「お前が立派なレディって奴だったら、気を利かせてやっても良いがな」

そんなことを口走りながら、巧は椅子を引いてやる。

しかし、朝から随分と豪勢な食事だ。

貴族とやらは朝からこんな豪勢な料理を食べているのか。

まったく金の無駄遣いだ。こういった所で細やかな節約が行えないから、金策に困ったりもするのだ。

「本当なら使い魔は外で待機させるのだけど、特別に一緒にいさせているだけでもありがたいと思いなさい」

「ああそうかよ」

鼻で笑ってそつぽを向く巧。

まったく、この目の前の桃色の髪をした娘の気位の高さには辟易す

る。

これだったら、園田真理のほうが幾分かまともだった。食事が始まる前に全員が両手を組み合わせ、目を閉じた。漫画やテレビで見たことがあるが、実際に目で見るのは初めての光景だった。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ今朝もささやかなる糧を与えたもった事を感謝します」

こういった宗教じみたことをやるのは初めて目にする。下らない、巧はそう感じた。

ささやかなる、なんて持ち得ないものからすれば豪勢なことだ。実に自分本位で勝手な言い分だ。

それに神なんているものか。

いるのだとすれば、今すぐにも自分を生き返らせて欲しい。なんて下らないことを考えながら空腹に耐える。

幾ら彼でも食事抜きというのは、少しつらいものがある。

目の前では自分よりも年下の少年少女たちが豪勢な食事を取っているのだ。これでイラつかない人間がいたら見てみたい。

かちやかちやと食器が音を立てていく中をただ一人、巧は黙っていたのだった。

食事を終わると外へ庭へと出て行く。

食後の散歩という奴だろうか。

石で作られた階段を下りていくと、芝の生い茂る中メイドが給仕をし、テラスで優雅に会話を楽しむ生徒たちがいた。

その傍らには、今まで見たことも無いような生物たちもいる。

「今日は二年生の授業はお休みなのよ。召還したばかりの使い魔とコミュニケーションをとるのよ」

「……俺は頼まれたってごめんだがな」

心底気持ちの悪そうな目をしながら巧はそう呟いた。
中には犬のような使い魔もいる。

それをまじまじと見ながら溜息を吐いた。
あんなことをされてたまるか、という思いが思いっきり伝わってくる。

「あら？」ふと、声がかかる。

その声に振り返ると、真っ赤なトカゲのような何かを撫で回している褐色の美女がそこにいた。

巧が少し驚いたような表情をして唸ると、彼女は微笑を浮かべながら話しかけてきた。

「貴方サラマンダーを見るのは初めて？」

「サラマンダー？」

本当に人間という使い魔の特異性がよく解る。
こんなのが普通にいるのだから。

「そんなモン、俺みたいにつないでおかなくても平気なのか？」

「あら、契約をした使い魔は主人に忠実なの。別に貴方のように鎖でつながなくても平気なの。暴れたりも逃げたりもしないし、ねえーフレイム？」

彼女の問いかけに返答するかのように無くトカゲ。

どうやら彼女のいうとおりらしい。どうやら知能はそこまで高くは無いようだ。故に、使い魔として忠実に言うことを聞くのだろう。

勝ち誇ったような笑みを浮かべる彼女にルイズは「余計なお世話よ！」と怒鳴りつける。

なにやら悔しいのだろうか。

「ねえ、貴方最初からその辺を歩いていた平民をつれて来たんじゃない？」

立ち上がって挑発的なことを言う少女。

「爆発で上手く上手く誤魔化したけど」

「違うわ！ちゃんと召喚したのに、こいつが来ちゃっただけよ！」
「ま、ゼロのルイズにはお似合いよねえ」

小ばかにした風に笑い声を上げると、そのまま立ち去っていく少女とサラマンダー。

おーほっほほ、なんて笑い方をする人間がいるなんて。

まさに異世界、しかも魔法やら貴族という言葉がある世界だ。

「何なのあの女ああ！」

握りこぶしを作ってルイズはそう唸る。
そしてその怒りは巧に向く。

「ぼさつとしてないでお茶ぐらい持つてきなさいよ！」

「鎖で行動制限している奴が何を言いやがる」

「ああもう！ほら、その鎖を取ってあげるから！」

そついうと彼女は懐から鍵を取り出して、巧の首輪を取り去ってやった。

持っていたということはいつでも外せるようにしておいた、ということになる。

もしかしたら、この少女思っているよりもやさしいのかもしれない、

なんて巧は思ってしまった。

「ほら、早く行きなさい！」

「はいはい」

彼女にせかされて自由になった巧は歩いていく。

溜息をはきながらけだるげな表情で、ぼんやりと歩いていると、一人のメイドにぶつかってしまった。

「悪いな」そういつてメイドに手を伸ばす。

「いえ、私も前をよく見ていなかったの」

そう言いながら彼女は立ち上がる。

傍らには地面に落ちたケーキが。

それを皿の上に戻すと、メイドが何かに気がついた様に話しかけてきた。

「あの、貴方もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になったっていう……」

「俺のことを知っているのか？」

「ええ、平民が使い魔として召喚されたってもう噂になってますから」

成程、先程も思ったがやはり人間が使い魔になるという事は特異な事らしい。

一日で一介のメイドにまで話がつたわっているのだから。

「ま、俺にとっては貴族だとか平民だとかよく解らんが」

「魔法が使えるのが貴族で、使えないのが平民なんですよ？」

「へえ、成程な」

だからあそこまでみんな気位が高そうだったのか。

「お前は魔法が使えるのか？」

「とんでもない。私はここでご奉仕させていただいているだけの貴方と同じただの平民ですわ」

こんな世代の変わらない少女が給仕をしなければならないとは。どうもやはり常識というものが違うらしい。

アルバイト的な感覚なのだろうか。

いやいや、自分の世界ではこの年頃は大体、高校に通っているのが普通だ。

こんな所で働いているなんて、あまり聞いた事が無い。

「おい、ケーキはまだかい」

気障ったらしい話し方で声が聞こえてきた。

どうやら、このケーキを待っていたのは、あそこになにやら毛むくじやらの生物をひざに乗せて女子と会話していた金髪らしい。

「はいいただきます！」

目の前のメイドはそういうと、そのままケーキを取替えに行こうとする。

巧は一言がんばれよ、とだけ声をかけると自分も本来の目的を達成しようとして移動を開始する。

その途中で「ギーシュ様……」などと呟く栗色の髪の生徒が通りかかった。

それと同時になにやら慌てた風に移動を開始する金髪少年。

ここで巧の脳裏に妙な考えがよぎる。

「もしかして、お前の探しているギーシュって奴は金髪の男か？」

「え、ええ」

「だったらむこうにいたぞ」

巧が指した方向にギーシュの姿を見つけた少女は、満面の笑みで向かっていく。

それに慌てた風にギーシュは苦笑いする。

その光景をしばらく眺めていた巧だったが、やがて「嘘つき！」という言葉と同時に平手打ちを食らって弾き飛ばされるギーシュを見て思った。

何処でも女って生き物は強いものだ、と。

二人が去っていくと周囲から笑い声が響く。

「ふられたなあ、ギーシュ。ま、自業自得だけどさ！」

小太りの少年が嘲笑しながらギーシュにさういう。

その通りだ、なんてぼんやり思いながら彼のことを見てみると、ギーシュは巧をにらみつけて立ち上がった。

「どうやら、君は自分の立場が解っていないようだな」

意味が解らない。

「おいおい、ただの八つ当たりならどっかに行ってくれ」

「君は貴族に対しての礼儀も知らないようだ」

「そうかよ。俺は別にそんなものを必要としなかったからな」

「よかるう、君に決闘を申し込む！」

「決闘？」

「その通り。君に決闘を申し込む」

とうとう頭でも茹で上がったかこの気障ったらしい馬鹿は、なんて思いながらギーシュの会話の続きを聞く巧。

「君は平民の、それも使い魔の分際で僕を侮辱し、あまつさえ二人のレディをも泣かせたッ！」

芝居じみた手振りですういうギーシュ。

貴族ってのはこうも頭の中身が残念なのだろうか、などとぼんやり聞き流す巧。

今やるべきは自分のご主人様気取りの桃色髪にお茶を届けることなのだが。

「泣くどころか、起こっていた風に見えるがな。それにそれは俺のせいじゃねえ、お前が二股をかけるのが悪いんだろ」

その言葉に再び周囲から嘲笑が沸き起こる。

「ッ覚悟は良いな！ ヴェストリノ広場で待ってる」

最後まで気障ったらしい動作で去っていくギーシュ。

ただの馬鹿だろうが、売られたけんかは買うほがあるまい。それに、あんな言いがかりをつけられて黙っていられるか。

「あんた！ なにやってるのよ！」

巧の腕を引っ張ってその場から移動するルイズ。何処からか見ていたのだろう。

「なんだよ。お茶なら」

「難だよじゃ無いわ！ 何勝手に決闘の約束なんかしてんのよ！」

「で、何処に行くんだ？」

「ギーシュに謝るのよ。今ならまだ許してくれるかも知れない」

「嫌だね」

そういうと巧は足を止めた。

「別に俺は何一つとして悪いことをしたという気はない。ただ、あいつが自滅したただけだ」

「あんた、何もわかってない！ 平民は貴族に勝てないの。怪我ですめば良いほうなんだから！」

「怪我ですめば良いほう、ね」

今更だ。と彼は呟くと先程ギーシュに話しかけていた小太りの少年に場所を尋ねる。

彼は面白そうにその場所を告げると、巧は礼を言ってその場所へと向かって言った。

よほど退屈していたのだろう。

「マリコルヌ！」ルイズがとがめるように声を上げるが、とき素手に遅し。

巧は走ってその場所へと向かっていくのであった。

「いやあ、これは見物だねえ！」

なんて笑いながら言うマリコルヌとは対照的に、ルイズは眉間にしわを寄せて、

「もっつ！ 使い魔の癖に勝手な事ばかりするんだから！」

と叫んで巧の後を追いかけていくのであった。

異なる世界の異なる人間（後書き）

いやー面倒だね。

本当に。因みに他のライダー登場はディケイドだけを考えています。

一応、話の都合を付けるために、けどね。

さて、ファイズギアを何て名前にしようか。

灰にする演出って無機物に対しても有効だっけ？

あれ、割と気に入ってるんだけど。

小規模な爆発が起こった後に紋章が刻まれて、そのまま灰になって崩れ落ちるの。

サイガ戦のときとか特に。

そんなこんなでのんびり続いています。

次は決闘です

open your eyes for the next
f
a
i
z
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3760z/>

ゼロの使い魔、たっくんが使い魔になりました。

2011年12月31日17時37分発行